

描かれた江戸の大地震——安政江戸地震と鯨絵を読み解く

土田 宏成

はじめに

「日本人はどのように災害を乗り越えてきたのか」というテーマの下、本稿では幕末の江戸を襲った安政江戸地震を取り上げる。幕末は、外交、政治、経済、社会ともに動乱の時代であったが、大地もまた動乱の時代であった。一八五三年（嘉永六）七月（日付については旧暦ではなく新暦〈太陽暦〉を用いる。以下同じ）にアメリカからペリー艦隊（黒船）が来航し、江戸幕府に対して開国を求めた。翌五四年（嘉永七・安政元）三月に幕府は、再来航したペリーと日米和親条約を締結し、二〇〇年以上続いた鎖国から開国へと、大きく対外政策を変えた。

対外関係の変動は、国内に大きな変動を引き起こしていくのだが、その年の十一月四日、紀伊半島東南部の熊野沖から

遠州灘、駿河湾内にいたる海底を震源とする安政東海地震（マグニチュード八・四）が発生、翌五日にはその西隣の紀伊水道から四国沖の海底を震源とする安政南海地震（マグニチュード八・四）が発生した。連続して発生した巨大地震の揺れと津波によって、関東から九州におよぶ広範囲で大きな被害が生じた。安政東海地震の死者は二千〜三千人、安政南海地震の死者は数千人といわれている^①。

そして、その一年後の一八五五年（安政二）十一月十一日には、東京湾北部を震源とする安政江戸地震（マグニチュード七）が発生し、江戸で一万年前後の死者を出した。現代風にいえば、「首都直下地震」である。安政江戸地震では、地震直後に「鯨絵」と呼ばれる地震をテーマにした印刷物が流行した^②。本稿が注目するのが、この鯨絵である。鯨絵からは江戸時代の日本人が地震という災害をどのように受けとめていたのかを知ることができる。しかも絵で表現されているた

め、現代人にもわかりやすい。江戸時代の人々は、震災という悲劇をどのように乗り越えていったのだろうか。

一、鯨絵とは何か

まず鯨絵と何か。『日本史広辞典』（山川出版社）の簡潔で要点を押さえた説明によれば、「江戸後期に地震災害をきっかけに出版された一枚摺の版画。瓦版の一種。一八五五年（安政二）一〇月二日に江戸でおきた安政の大地震の際に数多く出され流行。地震の原因を地中の大鯨とみなし、鯨を鹿島大明神が要石で押さえ込むとの俗信からきている。地震で儲けたとされる職人・商人などの姿を描く図が多く、地震を「地新」と表記し、新しい世の中に変わるという世直しの意味も考えられる」とされている^③。

現在地震のしくみは、プレートテクトニクスで説明される。しかし、現代の科学でも説明されていない部分がある。そのことを、私たちは東日本大震災で思い知らされた。ましてや今から一五〇年以上も前のこと、人々は地下の大鯨が動くことで地震が起きると考えていたのである。だから、地震を表現する絵に鯨が登場し、その絵は鯨絵と呼ばれるようになったのだ。

では、なぜ鯨なのか。地震発生前の鯨の異常行動が人々に

観察され、それによって鯨と地震が結びつけられるようになったのではないかと考えられるが、現在確認されている鯨と地震を結びつけた最も古い記録は、一五九二年の豊臣秀吉の手紙である。伏見城の建設について「なまつ大事」、つまり地震対策をしっかりと行なえと指示している。やがて、ひろく庶民の間に、地震は地下にいる大鯨が起こすと信じられるようになった^④。科学が進んだ現代では迷信に過ぎないが、今でも鯨＝地震のイメージは残っており、地震に関わるキャラクターとして使われたりしている。

そして、その大鯨を暴れないように押さえられているのが、「鹿島大明神」（武甕槌神^{たけみづののみ}）であり、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）にまつられている神様である。大鯨を押さえ込んでいる^{かなめいし}「要石」も、鹿島神宮の境内の奥まったところにある。地上に出ている部分は小さいが、巨大な石であるとされる。

なお、安政江戸地震が起きたのは新暦では十一月だが、当時使われていた旧暦では十月、「神無月^{かんなづき}」に当たる。この月には、地方の神々は出雲大社（島根県大社市）に集まるといわれ、出雲以外の各地では神様が留守になる（だから神無月という）。この俗説にしたがえば、鹿島大明神が留守の間に、大鯨が暴れ、地震を引き起こしたことになるのだ^⑤。これで鯨絵の基本的な図柄の意味は理解できよう。

さて、鯨絵は庶民向けに販売された。ゆえに庶民の思いや

願望がそこに表現されていると考えられる。鯨絵の内容は、地震後、時間の経過とともに変化していく。地震直後の鯨絵では、大鯨は「破壊者」として描かれ、もう地震を起こさないように鹿島大明神によって要石で押さえつけられたり、被災者たちによって懲らしめられたりしている。これはわかりやすい。しかし、その後、「救済者」として描かれるようになっていく。これは現代の私たちには、ちょっと理解がたいことだろう。

歴史への関心の持ち方はさまざまであろうが、現在と同じところよりも違うところに注目すると面白い。自分と違う価値観に触れることは、人としての深みや幅を広げてくれるからだ。さあ、どのような人々がどうして大鯨、すなわち地震によって「救済」されたと感じたのだろう。彼らは震災からの復興で利益を得た人たちであった。それは鯨絵にどのように表現されているのだろうか。では、鯨絵を見てみよう。

二、鯨絵を見てみよう

インターネットの発達によって、貴重な歴史資料も鮮明なデジタル画像で手軽に閲覧できるようになった。しかも画像の拡大も簡単にできる。鯨絵が閲覧できるウェブサイトとして、次のようなものがある（二〇一二年八月末現在）。

① 東京大学附属図書館「かわら版・鯨絵にみる江戸・明治の災害情報——石本コレクションから」の「5. 安政江戸地震（1855年）と鯨絵」
<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2008/collection5.html>

② 筑波大学附属図書館「電子化資料（貴重書コレクション等）」の「鯨絵」
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tree/namazue.html>

③ 消防防災博物館「鯨絵に見る安政大地震」
http://www.bousaihaku.com/cgi-bin/hp/index.cgi?acl=R204&ac2=R20407&Page=hp_view

書籍では、宮田登・高田衛監修『鯨絵 震災と日本文化』（里文出版、一九九五年）がある。カラー図版も多く、詳しい解説、研究も含んだ鯨絵の百科事典である。公共図書館などで閲覧してほしい。また、浅野晃・加藤光男『原典で楽しむ江戸の世界 江戸の文学から浮世絵・錦絵まで』（里文出版、二〇〇四年）にも、鯨絵が取り上げられている。ただし、こちらは白黒印刷である。

インターネットで画像を閲覧しながら、本の情報も利用し

て、読み解いていくのがよいだろう。本稿でもそれを試みてみる。以下では一枚の鯨絵を取り上げる。さあ、インターネットに接続されたパソコンを立ち上げてみよう。

①「しんよし原なまづゆらひ」

前掲した東京大学附属図書館のウェブサイトで見られる (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2008/photo/5-1.jpg>)。

タイトルを漢字で表記すれば、「新吉原鯨由来」となる。

「吉原」は江戸を代表する歓楽街として有名である。もとは日本橋葺屋町にあったが、一六五七年（明暦三）に浅草日本堤に移転した。これを「元吉原」「新吉原」と区別している。安政江戸地震では、吉原も震動と火災で壊滅的被害をこうむった。この頃の吉原の遊女数は、五〇〇〇人程度で、全体の一割程度が死亡、けが人も多く出たのではないかと推定されている^①。

では、鯨絵を見てみよう。絵の全体に大鯨が描かれ、右下に小鯨もいる。その鯨の上に乗って、人々が懲らしめている。こぶしで殴る者、棒、煙管、三味線、徳利、枕、包丁を手持っている者もいる。小鯨を懲らしめているのは、子どもたちである。地震に対する人々の怒りがストレートに表現されている。ところで、画面左上に描かれている人々は、ど

のような人々だろう。一見すると、鯨を懲らしめるのに加勢しようと駆けつけてきたようにもみえるが、そうではない。

それから絵だけでなく、文字も書かれているのがわかる。

それらは鯨を含む登場人物たちのセリフになっている。現代のマンガの表現に近い。江戸時代の人々の思いや、どんな話し言葉を使っていたのかを読み取れるのだ。それを活字に起こしたものが、やはり東京大学附属図書館のウェブサイトで見られる (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2008/img/exp/5-1.pdf>)。前掲『鯨絵』にも載っている（二六七～二六八頁）。

遊女たちは、こんなことを言っている。「いめいましい大なまづめ／セツかくいゝ人がくるばん（来る晩）に／あばれやがつた／にくらしいなまづめ／たんとぶて、ぶて、ぶて」、「此なまづめ、すかねへやつ（好かねえ奴）だ、おいらのをきやく（お客）をどこへ（何処へ）／やらまいなくした、だせ、だせ、だせ」。地震発生は夜の十時頃であった。遊女の一人はせっかくの馴染みの客が来る晩に地震なんか起こしやがってと怒り、もう一人は地震で客が行方不明になってしまったのだろう、客を出せと怒っている。その他の男性たちも、ぶち殺して食ってやると激しい怒りをあらわにしている。

それでは怒りの矛先が向けられている大鯨の方はどうだろうか。表情からしてとぼけた感じだが、画面一番左に大鯨の

セリフも書かれている。「をいらん（花魁）たちに／のられて、うれしいよ、うれしいよ、うれしいよ／そんなにのると／またもちあげる（持ち上げる）よ／いすぶる（揺すぶる）よ／いいかへ、いいかへ、いいかへ」。なんと痛がるどころか、美女に乘られてうれしいといい、地震を起こしたことを反省するどころか、また地震を起こすよ、といっているのである。何ともふざけた態度である。

そして前述した画面左上の男たちは、何といっているのだろうか。「まちねへ、まちねへ、まちねへ／おれがとめた」、「まッて／くれ、まッてくれ、まッてくれ」、「おい、おい、おい／そんなにぶち／なさんな、ぶちなさんな、ぶちなさんな」。そう、懲らしめる側に加勢するのではなく、大鯰に同情し、助けようとしているのだ。なぜだろう。そこには彼らの職業が関係している。

彼らは、その服装や持ちものからみて、大工や鳶、左官などの建築関係の職人たちである。地震後の復旧・復興で、通常ではあり得ないほどの仕事にありついたので。つまり、地震によって利益を上げた人々である。立場によって、地震に対する思いに違いがあったことが表現されている。

②「長者金の病ひ」

前掲した筑波大学附属図書館のウェブサイトで見られる

(<http://www.tuijts.tsukuba.ac.jp/pub/picture/others/nomal/namazu-13/namazu-13.html>)。

タイトルは、金持ちの金の病気ということである。ここでは鯰が擬人化され、鯰男として登場している。金持ちは病気になる、吐いたり、下痢をしたりしている。でも口から吐いているもの、尻から出しているものは小判である。画面右には、壊れた土蔵が描かれている。地震で金持ちが財産を失っただけでなく、貯め込んだ金を使わなければならない状況に陥っていることが表現されているのだ。画面の上方には、彼らのつぶやき（ぼやき？）が書かれている。それを活字化したものが、前掲『鯰絵』に載っているが（三〇〇～三〇二頁）、さらに分かりやすくするために漢字に変換したのも掲げる。

どうも

かうくだつてはハ

たまらないから、ちつと

つうじをとめやうと

おもひますが、しりのしまりが

わるくなつて、アレまたそろそろ

でかかつてまいりました、「わたくしハ

もはやはらがべつたりとなりました、

これからそろそろしまいこんで

おいたきんでもたれずハなります

まい、どうぞこれをれうぢするいしやが

ありそうなものでござる、しかしこの

ひりだしましたのハ、かく字のはんてんや

ながばんでんでさらつてまいり

ますから、わたくしどものはらのあん

ばいハわるくなりますかハリ、

よのなかハじうぶんよく

なるそうでございます、「それを

おもへバわたくしハいくら

たれてもようございます

から、うんといきんでもう一ツ

おほかたまりを、イヤこれハ

したり、こんどハぜにばかり

こてこてでした、せけんのぜにそう

ばがやすくなるはずでございます

《漢字変換バージョン》

どうも

こう下っては

堪らないから、ちっと

通じを止めようと

思いますが、尻の締めりが

悪くなって、アレまたそろそろ

出かかって参りました、私は

もはや腹がぺったりとなりました

これからそろそろ仕舞い込んで

おいた古金でも垂れずばなります

まい、どうぞこれを療治する医者が

ありそうなものでござる、しかしこの

放りだしましたのは、角の字の半纏や

長半纏でさらって参り

ますから、私どもの腹のあん

ばいは悪くなります代わり

世の中は十分良く

なるそうでございます、それを

思えば私はいくら

垂れてもようございます

から、うんと息んでもう一つ

大塊を、イヤこれは

したり、こんどは錢ばかり

こてこて出ました、世間の錢相

場が安くなるはずでございます

なお、壊れた土蔵の壁には相合い傘と「たんと／よの中／いろいろ」という落書きがある。

鯨絵を購入するのは庶民である。ここにはどのような庶民の願望が描かれているのか。財産を持たない庶民は、そのぶん地震で失うものが少なかった。逆に金持ちの家や蔵を破壊され、財産を失った。さらにそれらの修繕・再建のために支出を余儀なくされた。それで仕事を得たのが、建築関係の職人である。長者のつぶやきにある「角の字の半纏」「長半纏」は、職人の服装のことだ。

さらに金持ち、被災者の救済のため金銭や物品を寄付しなければならなかった。これを「施行⁽⁸⁾」という。庶民は、もちろんもう側である。地震により、貧富の格差が縮小したように思われたのである。現在では、社会が豊かになり、庶民もある程度の資産を保有しているから、地震で失うものは小さくないので、ここまで話は単純ではないが。

脱糞の図はきれいなものではない。しかし、糞と金銭が同じものとして描かれていることに注目し、そこに意味を読み取るうとする研究者もいる。フロイトの精神分析の手法を用いると、無意識において糞便（金銭）＝子どもの等式が成り立つという。それをもとにこの鯨絵を読み解くと、人々がもう一度、子どもの再生産の問題を扱おうとしていると理解できることになる⁽⁹⁾。破壊と喪失から立ち直ろうとする意識である。

おわりに

さて最後に、冒頭に掲げた「日本人はどのように災害を乗り越えてきたのか」というテーマに戻ろう。幕末に流行した鯨絵から何がわかるのか。まず悲劇的な災害を描いた絵でありながら、そこに笑いやユーモアが溢れているということが注目される。「しんよし原なまづゆらひ」には、人命を奪い、生活を破壊した地震に対する怒りが表現されていた。しかし、大鯨はとぼけた態度をとっていた。「長者金の病ひ」は指摘するまでもない。現在、ユーモアや笑いに、悲しみや怒りをいやす効果があることは医学的にも証明されている。鯨絵は、現代でいう「心のケア」の役割を果たしていたといえる。人が求めるものは、時代を超えて共通する。

また、「長者金の病ひ」にみるように、地震からの復興過程における貧富の格差の是正など、社会のポジティブな変化に注目することで、新たな希望（「世直し」）を見出そうともしていた。癒しと希望こそ、復興の基礎であり原動力である。時代は違えど、東日本大震災を経験し、そこからの復興、そして、次なる大震災への備えが求められている現代日本にも参考となるであろう。

本稿では、二点の鯨絵しか紹介できなかったが、興味を持つ

た人は、本文・註で紹介したホームページや本を手がかりにして、楽しみながら、災害や歴史についての理解を深めてほしい。^⑩

註

- (1) 災害教訓の継承に関する専門調査会『1854 安政東海地震・安政南海地震』(災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 二〇〇五年三月、<http://www.bousai.go.jp/jishin/chubou/kyoukun/rep/1854-ansei-toukai-nankaiJSHIN/index.html>)、石橋克彦「安政東海・南海地震」(北原糸子・松浦律子・木村玲欧編『日本歴史災害事典』吉川弘文館、二〇一二年)。
- (2) 災害教訓の継承に関する専門調査会『1855 安政江戸地震』(災害教訓の継承に関する専門調査会報告書、二〇〇四年三月、<http://www.bousai.go.jp/jishin/chubou/kyoukun/rep/1855-ansei-edoJSHIN/index.html>)、滝口正哉「安政江戸地震」(北原ほか前掲『日本歴史災害事典』)。
- (3) 日本広辞典編集委員会『日本史広辞典』(山川出版社、一九九七年)。
- (4) 寒川旭『地震の日本史——大地は何を語るのか 増

補版』(中央公論新社〈中公新書〉、二〇一一年)。

(5) 若水俊『江戸っ子気質と鯨絵』(角川学芸出版〈角川学芸ブックス〉、二〇〇七年)。

(6) 滝口前掲「安政江戸地震」。

(7) 若水俊『安政吉原繁盛記——大地震と遊郭』(角川学芸出版、二〇一〇年)。

(8) 北原糸子『地震の社会史——安政江戸地震と民衆』(講談社〈講談社学術文庫〉、二〇〇〇年)、二〇一三年増補され、吉川弘文館より刊行。

(9) 牧瀬英幹「集団的創造力と病理——『鯨絵』の生成と主体の再構成を巡る問題」、『日本病跡学雑誌』七九(二〇一〇年六月)。

(10) その他、鯨絵に関する体系的な研究に、富澤達三『錦絵のちから——幕末の時事的錦絵とかわら版』(文生書院、二〇〇四年)がある。地震を含めた災害の歴史については、北原糸子編『日本災害史』(吉川弘文館、二〇〇六年)を参照のこと。